

柞乃杜

秩父神社社報

柞乃杜(ははそのもり)

第 65 号

令和4年7月20日

(川瀬祭)



田植かな

里の

果たして

春山入り

秩父で三年後の全国植樹祭

今から三年後の令和七年初夏に 埼玉県内で開催される第75回全国植樹祭の会場として 秩父市と小鹿野町とにまたがる広大なミューズパークが選ばれたことはご同慶の至りです。

林野庁が主催する県ごとに毎年植樹祭は 天皇后兩陛下のご臨席を仰ぎ 国土緑化運動の中心となる行事として全国各地から緑化関係者等の参加を得て 兩陛下によるお手植えをはじめ参加者の記念植樹などを通して日本人古来の誇るべき森林文化を現代に活かす機会となります。

とりわけて令和七年度初夏の秩父植樹祭が 尊いご神慮とも表すべき深ゆかりを想わしめることは これも天皇陛下のご聴許による先例によれば 来たる伊勢の第六十三回式年遷宮の八年前に当たる「遷宮元年」が同じく令和七年に当たり 当地の全国植樹祭と呼應するかのようになり、山「口祭」「木本祭」と木曾山中の「御杣始祭」とが齋行されるかも知れません。

解説 秩父神社(63)

杉山正司

◆ 秩父神社宮司家蘭田氏と 関東代官頭伊奈氏(一)

新史料発見

秩父神社宮司家蘭田氏、そして関東の幕府直轄領(天領)を治める関東代官頭伊奈氏。秩父の近世史を語る上で、欠かすことのできない重要な両者。このほど蘭田氏と伊奈氏は、意外な関係があったことを記録した史料が発見された。これまで知られざる蘭田氏と伊奈氏の繋がりについて、今回から紹介していきたい。

秩父神社と徳川家康

戦国時代後半の秩父地域は、小田原北条氏(後北条氏)が勢力を伸ばし、鉢形城を守る北条氏邦の支配下にあった。 天正十八年(一五九〇)八月、後北条氏を下した豊臣秀吉の命により、徳川家康が江戸に入り、関東を支配することとなった。この時、秩父神社を参詣し、妙見軍神の神威と家康自身が寅年生まれであることに通じた当



徳川家重朱印状 個人蔵【西角井家文書】(埼玉県立文書館寄託)

翌年十一月、家康は社領五十

七石の朱印状を発給し、歴代將軍はこれに倣って代々朱印地を安堵している。五十七石とは、やや半端な石高に感じられるが、鉢形北条氏の七石を先例として認め、これに五十石を加えたためという。

当社(妙見社)は、家康の先例に倣って歴代將軍から朱印状が下された。しかし、太政官は、慶応四年(一八六八)に宮・公家・諸侯・全国の社寺に命じて、新政府内国事務局に將軍からの



徳川家慶朱印状 個人蔵【西角井家文書】(埼玉県立文書館寄託)

現在、埼玉県立文書館に寄託されている。

閑話休題。さらに天正二十年(一五九二)九月には、家康が大旦那となつて社殿を造営した棟

朱印状の提出をさせた。神社で応じたのは、三四%であったという。政府は、それを裁断して廃棄してしまった。前政権の否定である。

ところが、明治初年、氷川神社社家の家柄である西角井忠正氏(明治十年没)が、古

道具屋に山積みにされている氷川神社の朱印状を含む紙束を見つけた。この中に半裁された妙見社宛の九代家重と二代家慶の朱印状が含まれていた。

札があるが、当社参詣の折に妙見軍神と寅の秘法を頼み発願したのである。棟札には、わずか三ヶ月で竣工したことが記されており、現在の社殿よりは簡素であったとみられる。なお、拜殿の一連の虎の彫刻は、天和年間(一六八一〜八四)の作とされるが、こうした家康との関りに因むといえるだろう。

代官頭伊奈氏の支配

このように秩父神社を通して、秩父郡は將軍や江戸幕府との関係が近く、それは重視していることが支配からも見て取れる。

家康は、江戸に入ると秩父地域を直轄領とした。三河以来の譜代大名が、関東各地に配されるなか、当地域は徳川家が直接治めることとされ、支配を任されたのが代官伊奈備前守忠次である。

幕府が開かれても続き、ようやく忍藩主阿部忠秋に秩父大宮を中心に荒川右岸地域が与えられたのは、寛文三年(一六六三)のことである。秩父大宮に陣屋(現在の埼玉県秩父地方庁舎)を置いて支配した。(元埼玉県立文書館館長)

社叢学会を送り、全国植樹祭を迎える

宮司 蘭 田 稔

恐らくは人類史上の大事業にも記録されるに違いない新型コロナウイルスの大流行もどうやら終息の気配が見えて、三年越しに滞った世相の万事がそろりと動き出すなか、さすがに地元コミュニティならではの七月二十日川瀬の祓いと山車曳行の神賑わいも、満を持して敢行されることになりました。今年の夏は、六月の月末に早くも梅雨明けとなり、連日猛暑の日和に見舞われて、ウイルス感染の恐れに熱中症の危険が加わるといふ、まさに多難な状況の下での神事祭礼となりますが、そもその夏祭は元来、悪疫流行の困難さに地域を挙げて耐え抜くための活力と祈りの業でしたから、どうか精一杯の防除を尽くしてのご奉仕をお願いするばかりです。

さて、いささか私事にも係わることながら、やはりコロナウイルス禍のせいで三年越しの懸案事項となつてしまつたNPO法人「社叢学会」の2022年次総会を、ようやく今年六月十日と十一日両日の日程で秩父神社の参集殿と境内林（柞乃杜）を会場に開催し、翌十二日のバス視察をも含めて首尾よく済ませたことが何よりのことでした。

因みに、この「社叢学会」という学術団体は、今から20年前の平成十四年の春に京都市内の総氏神である下鴨神社（正式には賀茂御祖神社）の名高い糺（ただす）の森で産声を上げた。



社叢学会2022年次総会集合写真神門前

実は、今回改めて年に一度の会員総会と研究大会を全国各地の由緒ある社寺の社叢の土地に求めて開催するのに、わが秩父の土地を候補に選んでもらつたかと申しますと、もちろん表向きには、日本各地のどこにもある山水風土の土地柄にあつて、それなりに豊かな神仏の霊山や社叢がありながら、近代の急激な工業化と都市化による伝統的なコミュニティの弱体化や解体を辿るなかでの、地域コミュニティ再生への模索事例の紹介というところでしたが、要は正直なところ、これまで8年ほど本学会の代表理事を曲がりなりに相勤めて参つた区切りを付けるべく、いわば会員諸兄姉への感謝を表する引退興行のつもりでした。

さは然りながら、三日間にわたる年次総会の、まず六月十日夕刻からの理事会とその後の懇親会、翌十一日朝からの当社正式参拝と記念撮影、会員総会に続く午前中の研究発表会と昼食時の境内林見学会のあと記念シンポジウム「社叢が紡ぐ地域コミュニティ」があつて夕刻から夜にかけて慰労の会員懇親会。翌十二日朝にチャーターした大型バスで45人ほど、まず三峰神社の登拝と博物館見学、下山して昼食後、武甲山資料館、今宮神社正式参拝、最後に酒造りの森で買い物をして午後五時には西武秩父駅で解散と、ほぼ順調に日程をこなしたまで

は申し分ないところで、その期間中何かと面倒をかけた当社職員や雇人の皆さんを始め、本学会理事でもある今宮神社の塩谷崇之宮司、別けても三峰神社の中山

マを掲げて開催された愛知万博と、伊勢の第六十二回式年遷宮の八年がかりの事業開始「木曾山中の御杣始祭」とを、NHKに働きかけて平成十七年六月三日にテレビ実況中継させたことでしょうか。

高嶺宮司、中山昌人権宮司をはじめ職員諸兄には閉鎖中の博物館の特別公開など、記して御礼とする次第です。

先に触れたように、本学会を結成してから丁度二〇年を辿つたなかで、やはり思い出に残る大事業といえは、平成十七(2006)年の愛知万博への出展参加と、同二十三(2011)年三月十一日発生の東日本大震災への社叢被災と復旧の調査とでありました。まずほぼ十一年前の大震災については、岩手、宮城、福島を三県を中心に大津波の甚大な被災だけに数年がかりの調査成果として、つい三年前に『いのちの森をたどる—東日本大震災復興支援活動の記録』を自主出版。前者の出展記録としては、ハイビジョン映像作品『日本は森の國』を制作していますが、その内容で銘記すべきは、当時「自然の叡智」という画期的な大テ-

結びに、つい近ごろ内定したばかりの慶事について一言。今から3年後の令和七年初夏に埼玉県内で開催される全国植樹祭の会場に、当然のことながら秩父市と小鹿野町にまたがる広大なミューズパークが選ばれた由です。これが本決まりとすれば、当日の会場に天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、記念のお手植えを賜わること、地元・秩父郡市民にとり無上の光栄とご同慶の至りですが、弊社としても秩父宮家所縁の社としてご親拝を賜われれば大神達さぞかしご嘉納の御事と拝察致します。



【表紙絵解説】

この度の表紙絵画は、市内中村町在住の金室晃仁さんが、第五十回武甲山図画展に出展した秩父第二中学校三年生時の作品を掲載させて頂きました。

ご本人によると「秩父市歴史文化伝承館を訪れた際に、亀の子石の後ろにそびえ立つ武甲山が印象に残りました。後に亀の子石の由来を知り、その景色がより感慨深いものとなりました。武甲山には昔からよく登り、その度に澄んだ空気と静かな森に心身に癒されました」とお話しされました。

将来的に何らかの形で秩父に貢献できる人になりたいと考えている金室晃仁さんの今後益々のご活躍を期待しております。

【表紙歌解説】

春山入り 果たして 里の 田植かな

本誌の表紙に掲載させて頂いた右記の俳句は、本誌編集の折りに今回の金室晃仁君提供の武甲山の表紙絵を、蘭田稔宮司自身が見つけて句作した一句です。

宮司によりますと、「春山入り」とは、江戸時代の農山村で旧暦四月八日に住民総出で里山に登拝し国ほめ歌を歌って帰りに山の神を花に托して田の神に迎えるという行事が武甲山にもあつて、現行では新暦の五月一日の山開きを済ませて里の田植があるのを句にしたとのことでした。

秩父宮会報告

秩父宮会事務局 新井 君 美

本年は、大正十一年六月二十五日に秩父宮家が御創建されてより満百年の佳節にあたります。

去る五月三日には秩父宮祭が厳粛の内に斎行されたほか、六月五日には奥秩父・霧ヶ峰の記念レリーフ前において、本会と秩父山岳連盟との共催により奥秩父山開式が斎行され、当社権宮司である園田建（秩父宮会理事）が代表して参列致しました。

秩父宮雍仁親王殿下が、昭和二十八年一月四日に五十歳の若さで薨去あそばされてより数えて七十年の年にもあたり、格別な山開式となりました。本年の秋、九月十日（土）には、その御名を頂く秩父宮記念市民会館の大ホールにおいて、「秩父郡の歌」を中心としたリサイタルや雅楽演奏会などを計画しております。

多くの皆様に秩父宮両殿下のご遺徳を知って頂く機会とすべく、無料での開催を考えております。近くなりましたら広く告知を申し上げますので、ご来場のほど心よりお待ちしております。



就任 挨拶

氏子青年会会長 中村 文 治

令和四年度総会におきまして、第十四代会長に就任致しました。東町の中村文治です。

氏子青年会の精神に基づき、清く、明るく、美わしい社会の繁栄と調和を志し、人と人とのつながりを大事にし、会員皆様が楽しく参加する事が出来る事業に取り組みで行きたいと思っております。

また、本年度は二年間延期されていた、全国氏子青年協議会 関東地区連絡協議会研修埼玉大会が開催されます。会員皆様に周知し、県内氏子団体と協力した活動を考えております。

園田宮司様をはじめ神社職員の皆様、協力会の皆様に変わらぬご指導を賜ります事と、会員の皆様に当会事業への参加協力をお願い申し上げます。そして、大島前会長の慰労と功績に感謝を申し上げます。新役員を代表し、挨拶と代えさせていただきます。

退任 挨拶

氏子青年会前会長 大島 隆 芳

令和四年度総会におきまして、会長職を退任いたしました。

二年という期間、名誉ある会長という立場で秩父神社の祭典、神事にたずさわることが出来たのも、園田宮司をはじめ、皆様のご協力によるものと感謝し、謹んで御礼申し上げます。

コロナ禍で活動は縮小の中でしたが、普段通りに氏子活動や祭りができることが、いかに貴重な事なのかを深く感じた次第です。この経験を基に、これからも変わらぬ郷土秩父の発展に寄与していく所存です。結びに、中村新会長のもと、氏子青年会がより強く結び付き、更なる発展ができますこと、そして秩父神社様の益々のご隆昌をご祈念申し上げます。退任の挨拶とさせていただきます。

梶だより



〔鎮座二〇〇年奉祝事業〕

奉賛者御芳名簿(11)

令和三年十二月〜令和四年六月迄

神社扱い

五千元 畑 加都美

◆ 奉納報告



昭和五十八年に結成された原谷講は今年で四十周年を迎え、これを記念して金壺拾萬円

◆ 富田 孝大総代のご逝去



去る一月二十八日享年八十六歳をもって富田孝大総代がご逝去されました。

富田様は昭和十年のお生まれ。中央大学経済学部を卒業され、昭和四十六年一月に横瀬村長に就任、昭和五十九年十月、初代横瀬町長に就任し平成十一年一月の退任までの間、町政に粉骨砕身ご尽力されました。

のご奉納がありましたのでご報告いたします。

◆ 絵画奉納

旧両神村（現小鹿野町）出身の守屋順吉画伯は画業六十年を迎え、これを記念して『呼春』『笈摺の母』二作のご奉納がありましたのでご報告いたします。



人格・識見に優れ、その卓越した指導力で埼玉県町村会長、全国町村会常務理事を歴任。

当社に於いては神饌田田主として例大祭新穀奉獻祭に毎年新米を奉納、平成十二年からは大総代にもご就任頂き、当社の護持運営に貢献頂きました。中でも二千百年奉祝事業に於いては、御旅所斎場「亀の子石」大鳥居のご用材をご提供頂くなど物心両面においてお力添えを賜りました。茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

◆ 境内整備奉仕報告

株式会社清水スチール様より、境内車祓所など境内整備のご奉仕を賜りました。

◆ 埼玉県下武道大会

奉納演武奉告祭・講演会開催

恒例の秩父神社奉納埼玉県下武道大会は、本年も止む無く中止となり、その代りとして奉納演武と講演会を四月二十九日昭和祭斎行に合わせて開催致しました。



剣道・弓道・柔道それぞれの代表者による演武。関西大学アレキサンダー・ベネット教授による特別講演会は盛会裡に終了致しました。

◆ 秩父神社妙見講

自 令和 四年 二月
至 令和 四年 七月

- 四月 一日 宮側講
- 五月 五日 原谷講
- 五月 八日 近戸講
- 五月 二十九日 中宮地講
- 五月 二十九日 齋藤眞一講元外百六十六名
- 六月 五日 熊木講
- 田代勝三講元外百三十三名

◆ 氏子青年会役員名簿

名誉会長	園田 稔(宮司)
顧問	名譽総代・大総代 園田 建(権宮司) 丸岡庸一郎(東町) 原嶋 清(上宮地) 山本 修(上宮地) 吉田 恵二(中村) 井深 昭(熊木) 大澤 孝(龍馬) 小石川康彦(東町) 栗 龍馬(上町)
相談役	大総代(前大総代)心得 原嶋 修(中村) 大島 隆芳(本町) 中村 文治(東町) 関根 大介(中町) 黒澤 守(本町) 町田 博寿(熊木) 中 洋(熊木) 長谷川武史(宮側) 市川 幸司(中村) 柏葉 靖夫(金室) 高野 淳道(生)
幹事	幹事長 長谷川武史(宮側) 副幹事長 市川 幸司(中村)
副幹事	副幹事長 小川 篤史(中村)
事業部長	事業部長 今井 修(中村)
副事業部長	副事業部長 他 八名
総務部長	総務部長 守屋 太一(上町)
副総務部長	副総務部長 他 四名
監事	伏見 博樹(権彌豆) 宮田 和裕(権彌豆) 塚越 亮一(本町) 今井千賀男(道生)
常任幹事	佐怒賀 良(番場七十六名)

◆ 柞乃杜神前結婚式報告

秩父市桜木町 西村 恭一・恵美子様
東京都練馬区 岩堀和彦・朋代様
秩父市上町 吉田 収利・絃子様
秩父市上野町 山中 俊・和美様
東京都豊島区 山田友紀・百香様
所沢市元町 河内祐介・まゆみ様
末永く幸せなご家庭をお築きくださいますようお願い致します。

◆ 大総代就任

富田 能成殿 (四月一日付)

◆ 職員辞令

権宮司 園田 建 神職身分二級上昇級 (三月十日付)
巫女 小林知沙 願により職を免す
全 白井麻弓 願により職を免す (三月三十一日付)
主典 枝窪邦誉 権彌豆を命ず
実習生 福川健真 主典を命ず
巫女見習 町田詩歩 巫女を命ず
巫女見習 笠原美涼 巫女見習いを命ず
巫女見習 秋葉香葉 巫女見習いを命ず

◆御社殿保存修理工事進捗状況

株式会社 小西美術工芸社

今年の1月に、本殿・幣殿・拝殿の西面の「お元氣三猿」や「瓢箪から駒」等の彩色が施された彫刻が地元秩父の宮大工の手によって取り付けが行われ、西面の保存修理が完了し足場が解体されました。現在では、鮮やかに彩色が施された東側と共に皆様に御覧いただけました。

現在は、本殿背面及び拝殿正面が仮設足場によって覆われ、彫刻や銚金具及び拝殿正面の棧唐戸が取り外された状況です。東西面同様取り外された彫刻の調査が行われ、弊社日光工房にて彫刻の既存塗膜を落とす作業が進められています。特に拝殿向拝の彫刻（獅子、麒麟、恵比寿、



拝殿仮設状況



麒麟彫刻彩色落状況

大黒等）に、既存塗膜を落とすと痛みが激しく、これから設計監理者と

補修方法の検討に入ります。拝殿正面の完成予定は、令和4年11月を予定しています。「子宝・子育ての虎」の状況も秩父神社の例大祭（12月3日）には確認できると思いますが、本殿の彩色の作業となります。いよいよ「北辰の梟」の彩色作業となります。

工事最終盤に向け安全に留意し作業を進めていますので、引き続き崇敬者の皆様、また参拝者の皆様のご理解ご協力を賜ります様お願い申し上げます。

◆ 新人紹介

巫女見習い 笠原美涼



平成15年6月22日生まれ。秩父市大田出身。熊谷農業高等学校卒業。この度ご縁

がありまして四月より巫女見習いとして奉職させて頂くことになりました。

巫女見習い 秋葉香菜



平成15年6月9日生まれ。秩父郡小鹿野町出身。秩父高等学校卒業。

四月より巫女見習いとして奉職させて頂くこととなりました。

まだまだ不慣れな事ばかりの未熟者ではありますが、地元から遠方まで、毎年多くのご参拝の方々が訪れるこの秩父神社で、たくさん学び、経験し、より多くの知識を得て、秩父神社の魅力を皆様にたくさん知っていただけるよう務めて参りたいと思います。

この歴史ある秩父神社にご奉仕できることを誇りに思い、感謝し、一日でも早くご参拝の皆様から慕われる巫女になれるよう、先輩方のご指

導のもと、日々精進して参りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

編集後記

■ここに社報第六十五号をお届けいたします。

■令和四年度からご社殿保存修理事業は南面と北面の工事となり、いよいよ大詰めです。北辰の梟や子育ての虎等の彫刻も復元されます。南面と北面の工事は令和五年の未まで続く予定です。今しばらくお待ちください。

■未だ収まらない新型コロナウイルス感染症に加えて、今年二月二十四日に始まったロシアのウクライナ侵攻も重なり、世界中が未曾有の混乱に陥ったのみならず、多くの尊い命が失われていくことは誠に遺憾であります。戦争、コロナ禍共に一刻も早く収束することを願い祈り続ける所存です。



※ 本報の用紙は再生マット紙を使用しています。

令和四年(二〇三二)七月二〇日
編集 秩父神社社務所
発行 秩父神社社務所
〒368-0004 埼玉県秩父市番場町一三
TEL (〇四九四) 二二一〇二六二
FAX (〇四九四) 二二一五五九六
印刷所 有限会社 拓文社印刷所
〒368-0004 秩父市東町二七七八